様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：２２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１４７１

研究課題名（和文）ノーベル文学賞と日本　1958-1968年―日本人候補選考をめぐる政治力学

研究課題名（英文）The Nobel Prize in Literature and Japan 1958-1968: The Political Dynamics Surrounding the Selection of Japanese Candidates

研究代表者
吉武　信彦（Yoshitake, Nobuhiko）

高崎経済大学・地域政策学部・教授

研究者番号：８０２４０２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1958年から1968年までの10年間におけるノーベル文学賞と日本との関係に焦点を当てた。この時期の日本人候補は、谷崎潤一郎、西脇順三郎、川端康成、三島由紀夫の4人であった。この4人が日本人初のノーベル文学賞受賞を競うことになった。選考するスウェーデン・アカデミーの史料等に基づき、選考過程を明らかにし、最終的に1968年の川端康成の受賞に至ったかを解明した。ノーベル文学賞は、純粋に文学的評価により決まると考えられているが、実際には様々なアクターの思惑が錯綜した。川端の受賞は、「文学」をめぐる10年にも及ぶ政治力学の結果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日、世界で最も権威のある賞として、ノーベル賞は日本人の意識の中に深く定着している。強い憧れの中で、日本人受賞者の有無に国民、メディア、さらに受賞の可能性のあるとされる関係者すら翻弄され、その結果に一喜一憂する状況となっている。ノーベル賞に対してやや冷静さを失っていると評することもできるかもしれない。こうした日本の状況に対して、ノーベル賞自体を学問的な分析対象にすることで、見えてくるものがある。これまでの受賞者の選考過程などの分析作業を通じて、ノーベル賞自体の歴史の中での位置づけ、可能性と限界を検討することができるとともに、日本との関係についても冷静に現実を見つめることができるであろう。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the relationship between the Nobel Prize in Literature and Japan during the decade 1958-1968. The four Japanese candidates during this period were Junichiro Tanizaki, Junzaburo Nishiwaki, Yasunari Kawabata and Yukio Mishima. These four were competing to become the first Japanese to win the Nobel Prize in Literature. Based on the archives of the Swedish Academy, which selects the winners, and other documents, this study clarifies the selection process and clarifies how Kawabata Yasunari was ultimately awarded the prize in 1968. The Nobel Prize in Literature is considered to be determined purely on the basis of literary evaluation, but in reality, the award was the result of a complicated process involving various actors. Kawabata's award was the result of a decade-long political dynamic over 'literature'.

研究分野：国際関係論

キーワード：ノーベル文学賞　川端康成　谷崎潤一郎　三島由紀夫　西脇順三郎　スウェーデン・アカデミー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）日本・北欧関係史の中のノーベル賞

日本・北欧関係史の重要トピックとして、ノーベル賞がある。日本人受賞者の多い自然科学 3 賞（物理学、化学、生理学・医学）のみならず、文学賞、平和賞、経済学賞（これは正式にはノーベル賞ではない。同賞に準ずる賞として 1969 年授与開始）に対しても、日本人の間で関心が極めて高い。毎年 10 月の同賞の授賞者発表から 12 月 10 日の授賞式までの期間、注目度はピークに達する。今日では、世界で最も権威のある賞として、同賞は日本人の意識の中に深く定着している。強い憧れの中で、日本人受賞者の有無に国民、メディア、さらに受賞の可能性のあるとされる関係者すら翻弄され、その結果に一喜一憂する状況は、秋の風物詩ともいえるものである。しかし、ノーベル賞に対してやや冷静さを失っていると評することもできるかもしれない。

日本におけるこうした状況に対して、ノーベル賞自体を学問的な分析対象にすることで、見えてくるものがある。第 1 に、ノーベル賞を選考する側はいかなる過程で、またいかなる意図をもって授賞者を決定しているのか。特に、そうした選考が歴史の中で具体的にいかに展開されてきたのか。第 2 に、このノーベル賞選考の過程に日本人はいかにかかわってきたのか。実際に多くの日本人が候補となり、あるいは推薦者となり、この選考過程にかかわってきたことが知られているが、その実態はいかなるものか。これらの点に注目した分析作業を通じて、ノーベル賞自体の歴史の中での位置づけ、可能性と限界を検討することができるとともに、日本との関係についても冷静に現実を見つめることができるであろう。

（２）平和賞から文学賞へ

こうした問題意識から、ノーベル賞選考で最も政治性が強く出ていると考えられるノーベル平和賞の研究を始めた。特に、選考の政治力学の中で、歴史上、いかなる日本人候補がいたのか、またいかなる日本人推薦者がいたのかに焦点を当て、分析を進めた。

その過程で、日本と文学賞との接点についても注目する機会があった。第 1 に、1954 年、1955 年、1956 年、1960 年にノーベル平和賞候補になっていた社会運動家、平和運動家の賀川豊彦は、1947 年、1948 年にノーベル文学賞に推薦され、候補となっていた。賀川はノーベル文学賞の候補になった最初の日本人であった（引用文献①吉武、2013・2014）。第 2 に、日本側のノーベル賞推薦の動きについて調べていた際、1960 年代初めに日本外務省がノーベル文学賞の日本人受賞をめざして情報収集活動、支援活動を行っていたことが判明した。日本人初のノーベル文学賞受賞を出したいとの意欲がその背景にあった（引用文献②吉武、2010）。

以上の経緯から、ノーベル文学賞と日本人候補についても関心を深め、その選考過程について明らかにしたいと考えるようになった。

２．研究の目的

本研究は、1958 年から 1968 年までの 10 年間におけるノーベル文学賞と日本との関係に焦点を当てる。選考するスウェーデン・アカデミーの史料等に基づき、同文学賞の選考で日本人候補がいかに扱われ、最終的に 1968 年の川端康成の受賞に至ったかを解明することを目的にする。日本人が誰から推薦されていたのか。また、選考母体のスウェーデン・アカデミーはその日本人候補に対して、いかなる評価をしたのであろうか。

この期間、谷崎潤一郎、西脇順三郎、川端康成、三島由紀夫の 4 人がほぼ同時期に推薦されており、この 4 人が日本人初のノーベル文学賞受賞を競うことになった。本研究では、この 4 人全員に注目することが極めて重要と考えた。日本の文学界において川端の存在感は極めて大きく、ノーベル文学賞についても最終的に川端が受賞したため、川端を中心に選考が進み、決定されたと考えてしまうかもしれない。しかし、当時、選考するスウェーデン・アカデミー側は、日本文学はもちろん、個別の日本人作家についても基礎知識はなかった。そのため、1958 年からの 10 年間の選考で、徐々に日本文学についても理解が進み、その中で最終的に川端を選択したと考えられる。スウェーデン・アカデミーにおいて 4 人の候補が川端に収斂していったことを想定する必要がある。そのため、スウェーデン・アカデミーの選考を理解するためには、この過程を深く掘り下げる分析をしなければならない。

以上の理由から、本研究では上記の 4 人の日本人候補についてそれぞれ詳しく推薦の状況、さらにスウェーデン・アカデミーにおける選考の状況を考察した。

３．研究の方法

本研究では、1958 年から 1968 年までの 10 年間におけるノーベル文学賞の選考過程の 2 つの局面、すなわち推薦と選考を具体的に明らかにした。しかし、実際のところ、この 2 つの局面に限っても不明の点は多い。

（１）本研究で利用した資料

選考過程を明らかにするうえで最も重要なものは、選考母体であるスウェーデン・アカデミーの選考関係文書である。スウェーデン・アカデミーは 50 年ルールに基づき史料開示を行ってい

る。毎年、1 年ずつ関係文書を公開し、1968 年分は 2019 年 1 月に開示された。スウェーデン・アカデミーを訪問し、それ以前の文書を含めて開示史料を入手し、それに基づき、日本人候補 4 人をめぐる選考過程を実証的に解明した。

なお、この開示史料に関して注意すべき点は、選考にかかわるすべての文書が公開されるわけではないことである。スウェーデン・アカデミー全員が議論した際の議事録などの文書は、公開されることはない。そのため、選考過程を明らかにするためには限界があることも事実である。

（2）推薦

誰が日本人候補をいかなる理由づけで推薦したのか。

実際の推薦状の中身はスウェーデン・アカデミーを訪問し、現物を見るしかない。実際には、スウェーデン・アカデミー会員が候補を推薦した場合、口頭でなされることが多く、文書が残っていないことも多い。日本側で入手できる情報もできる限り活用した。

川端が受賞した 1968 年までの日本人候補の正式な推薦状況は以下の通りである。

賀川豊彦：　2 回　1947 年、1948 年。
谷崎潤一郎：7 回　1958 年、1960 年～1965 年。
西脇順三郎：10 回 1958 年、1960 年～1968 年。
川端康成：　8 回　1961 年～1968 年。
三島由紀夫：5 回　1963 年～1965 年、1967～1968 年。

（3）選考

スウェーデン・アカデミーは各日本人候補をいかに評価したのか。各年において世界中から推薦された候補の中で日本人候補の位置づけはいかなるものであったのか。また、日本人候補に対するスウェーデン・アカデミーの評価は、時代とともにいかに変遷したのか。

日本人候補についてスウェーデン・アカデミーの会員だけでは判断できない状況もあり、外部の日本文学専門家などに意見を求めたとされるが、その実態はいかなるものであったのか。

その他、選考にあたり、候補の作品の欧米言語への翻訳が重要となる。その状況は、いかなるものであったのか。スウェーデン・アカデミーの図書館には、世界中の文学作品が収蔵されているが、日本文学関係の文献の収蔵状況についても調査を行った。

４．研究成果

研究目的に挙げた 4 人の日本人候補について現地調査と文献調査に基づき、以下のような研究成果を得ることができた。主な点を中心に整理する。詳細は個別の発表論文を参照されたい。

（1）日本人候補作品の翻訳状況

1958 年以降に候補になった谷崎潤一郎、西脇順三郎、川端康成、三島由紀夫の 4 人の著作がいかにスウェーデン語、英語、ドイツ語、フランス語の 4 言語に翻訳されたかを明らかにした。翻訳の原本、状況、翻訳者、装丁などについて翻訳書の現物を見て確認した。次に、ノーベル文学賞の選考母体であるスウェーデン・アカデミーにおける日本人候補の著作（日本語および翻訳書）の所蔵状況も確認した。その結果、スウェーデン・アカデミーでの選考がいかなる著作に基づいて行われたかを推測することができた。

4 人の候補のうち、西脇を除く 3 候補の主要著作は、1950 年代中葉から英語、ドイツ語、フランス語に精力的に翻訳された。さらに英語版、ドイツ語版を元にしたスウェーデン語版も刊行されている。スウェーデン･アカデミーは基本的にこれら 4 言語の翻訳版を選考材料に利用したと考えられる。特に、英語版の翻訳者であるサイデンステッカー、キーン、ヒベットの果たした役割は大きかった。1950 年代末以降に、日本人候補が実際に推薦され、スウェーデン・アカデミーも注目するようになったのは、まさにこの翻訳状況によるところが大である。

（2）谷崎潤一郎

まず、1958 年に初めて候補となり、1965 年の死去まで有力候補とされていた谷崎潤一郎について取り上げた。その結果、日本側の期待ほどには、スウェーデン・アカデミーが谷崎を評価していなかった事実が浮かび上がった。谷崎は、1958 年、1960 年～1965 年の 7 回、候補になっていた。推薦者は、基本的に日本人以外であった。ライシャワー、ヒベット、パール・バック（ノーベル文学賞受賞者）、キーンら、アメリカ人の日本研究者、日本文学研究者、作家が強く推した。1960 年代には、スウェーデン・アカデミー会員も推薦者に加わった。日本からの推薦者としては、1958 年には三島由紀夫もいた。推薦者は、『細雪』をはじめとする作品を高く評価している。

他方、スウェーデン・アカデミーでは、谷崎は 1960 年、1964 年にショートリストの候補（候補総数の 10 分の 1 程度に絞り込まれた有力候補）とされ、アカデミー内のノーベル委員会による詳しい検討もなされた。しかし、その検討の中で、ノーベル委員会委員長の最終候補には選ばれなかった。選考にあたり、1962 年と 1964 年にはヒベットの専門家報告書、1963 年にはキーンの専門家報告書も提出され、スウェーデン・アカデミーの審議に利用された。

日本文学の作品が 1950 年代中葉以降、本格的に欧米で翻訳されるようになり、日本文学が実際にノーベル文学賞の対象になりうることがわかった。しかし、1960 年代前半までの選考では、

翻訳の少なさが何度も言及され、大きな制約になっていた。そうした中でも、ノーベル委員会が日本人作家を継続的に調査したことは意味があろう。その際の有力候補は谷崎であった。しかし、谷崎に対するノーベル委員会の評価を見ると、それは必ずしも高いものではなかった。ノーベル委員会のエステルリング委員長からは、代表作の『細雪』の表現法にも不満が表明されていた。数少ない翻訳を通して評価をせざるをえなかったノーベル委員会の限界が垣間見られる。谷崎の作品がより多く翻訳され、その評価についても専門家の意見を交えて深い議論が展開されていれば、ノーベル委員会の谷崎評も異なるものになっていたかもしれない。

（3）西脇順三郎

西脇順三郎は、1958 年、1960 年から 1968 年までの各年の計 10 回推薦されていた。どれも東京大学教授（途中から名誉教授）であった辻直四郎が推薦したものである。しかし、こうした辻の精力的な推薦運動は実ることはなく、徒労に終わった感がある。スウェーデン・アカデミー内で極めて厳しい評価しか受けられなかった。他の日本人候補、谷崎、川端、三島と比較すると、西脇への低評価は際立つ。西脇は選考レースで早々に脱落したと考えられる。

スウェーデン・アカデミーは、当初、西脇について著作の翻訳、関連資料がなく、評価できないという状況にあった。こうした状況を打開したのが、スウェーデン・アカデミーが依頼した専門家報告書であった。日本文学研究者のヒベット（1962 年、1964 年）、キーン（1963 年）の日本人候補に関する比較分析を通じて、西脇が谷崎、川端、三島と同列にはないことが明らかになった。また、日本で調査を行い、日本人の見解をまとめたスウェーデン人、ローンストローム（1965 年）の分析により、それは再確認される。すなわち、ノーベル文学賞受賞者として最もふさわしいと多くの日本人が考える候補は谷崎あるいは川端であること、西脇については作品も少なく、知名度もないことが示されたのである。

ノーベル委員会の評価を通して感じられるのは、委員が西脇の著作を読んで評価したとは考えにくいことである。上記の専門家報告書が委員の評価に決定的な意味をもったと考えられる。その原因は、西脇の著作に関して翻訳がほとんどなかったことである。これでは、西脇の詩作の全体像をつかむことはできない。ノーベル文学賞の選考において、評価の前提として翻訳の存在がいかに重要か、この西脇の事例は教えてくれる。

では、西脇の作品について翻訳があれば、スウェーデン・アカデミーは西脇を評価したかと問われると、そうとも言えない。西脇は欧米のシュールレアリスム、モダニズム運動の影響を受け、詩作を展開したが、そうした傾向は高く評価されなかった可能性がある。実際にヒベットの報告書にあるように、西洋文学の翻訳、研究に基づく創作活動は退屈と捉えられている。ノーベル文学賞であれば、スウェーデン・アカデミー会員の期待する「日本文学」、「日本文化」があったのかもしれない。

（4）三島由紀夫

三島は、1963 年、1964 年、1965 年、1967 年、1968 年の 5 回推薦され、このうち 1963 年、1967 年については有力候補者になっていた。その際、1965 年の谷崎潤一郎の死去が大きな節目になり、1965 年までは谷崎と三島に注目が集まり、1965 年以後は川端と三島に注目が移ることになった。三島は 1965 年以前の時期とその後の時期の両方に登場し、有力候補者の一人として検討されていたことがわかる。しかし、スウェーデン・アカデミーの選考においては、谷崎と川端の存在が大きく、若手の三島が文壇の重鎮である二人を追い抜き、選考でトップに立つことはなかった。三島が日本人として 2 番手の候補で終わったことは、ノーベル委員会報告書の分析でも明らかである。

スウェーデンで三島の才能は高く評価され、その作品にも注目が集まっていた。発表された新作がスウェーデン語に次々に翻訳されていた。英語版などの他の言語への翻訳も豊富で、それらも含めれば、三島の創作活動の旺盛さ、水準の高さはスウェーデン・アカデミーにも十分伝わっていたことであろう。

しかし、三島がノーベル文学賞をもらうことはなかった。それを理解するためには、特に 1963 年のキーンの報告書、サイデンステッカーの報告書、1965 年のローンストロームの報告書が参考になる。キーンは、1963 年の時点で谷崎、さらに川端を推し、若い三島がもし受賞すれば、日本人の間に奇妙な印象を与えることを指摘していた。また、サイデンステッカーの報告書では、三島の才能を高く評価する一方、多くの作品を出しつつも、まだ偉大さというレベルまでには到達したとは言えないことを指摘する。成長途上にある若手という印象をスウェーデン・アカデミーに与えることになった。こうした見方を裏付けたのが、1965 年のローンストロームの報告書である。同報告書は、文壇の存在感から谷崎、川端の二人が別格であり、どちらかは好みの問題であり、ローンストローム自身は両者がノーベル文学賞をもらうことを提案していた。谷崎、川端に比べると、三島の位置づけが日本人の間で高くないことがスウェーデン・アカデミー内で共有されたのである。これらの報告書の存在を考えると、スウェーデン・アカデミーが三島を評価しつつも将来の候補と位置づけたのは順当な結論であったのであろう。

（5）川端康成

川端は、1961 年から 1968 年まで毎年、ノーベル文学賞に推薦されていた。計 8 回である。推薦者は、1962 年が日本ペンクラブ、1967 年がアメリカ人のヒベットであったほかは、スウェー

デン・アカデミー会員が推薦している。スウェーデン・アカデミー内で、川端に対する知名度が高かったことがうかがわれる。

しかし、スウェーデン・アカデミーにおいて、川端に対する評価は、推薦当初はそれほど高いものではなかった。1962 年のノーベル委員会の報告書では、川端について注目はしているが、選考で真剣に検討することはできないとしている。1963 年のノーベル委員会報告書でも日本人候補 4 人のうち、川端が抜きんでている印象はないとしている。その一方で、1962 年、1964 年のヒベットの専門家報告書、1963 年のキーンの専門家報告書は、谷崎とともに川端を推す内容となっている。

1965 年は、日本人候補について大きな転換点になった。前述のように、有力候補であった谷崎が同年 7 月 30 日に亡くなり、結果として選考から外れることになった。また、1965 年にはこれも上述の通り、スウェーデン人、ローンストロームの専門家報告書が提出された。谷崎が存命中に日本で実施した精力的なインタビュー調査で、日本人候補のうちノーベル文学賞に値するのは谷崎、川端であり、ローンストロームはこの二人への授与すら提案していた。谷崎が亡くなったため、川端が選考のトップに躍り出たことになる。ただし、この年のノーベル委員会報告書では、川端が最も現実的で、谷崎死後唯一の地位にある候補との見方を紹介しつつ、翻訳が少なく、さらに検討を続けると指摘していた。

1966 年のノーベル委員会報告書では、川端を最終候補のトップに挙げ、川端を高く評価している。同年は、川端に関して日本の評論家、作家の伊藤整に川端についての専門家報告書を書かせている。それを踏まえたノーベル委員会は、谷崎死後、川端が「唯一の十分な実力のある候補として残された」と述べるとともに、伊藤の報告書に依拠して川端の選択が日本文学界の意見を確実に満足させるとの確信を深めている。また、川端の最新作『古都』を高く評価している。翻訳が限られている点を考慮しても、ノーベル委員会は川端を第 1 位で推している。

1967 年、1968 年のノーベル委員会の報告書では、川端はそれぞれ最終候補の第 2 位、第 3 位に指名され、高評価が続いた。1967 年には、川端とともに三島も上位 7 人の有力候補にはなっていたが、三島は最終候補にはなれなかった。エステルリング委員長は、三島の精力的な執筆活動に触れつつも、川端を評価している。

こうした状況で、1968 年のスウェーデン・アカデミーは、議論の末に川端をノーベル賞授賞者に選んでいる。1965 年を境に日本人候補として川端が抜きんでた存在として認識され、いつ選ばれてもおかしくない状況にあった。ノーベル文学賞の受賞者を地理的に欧米以外に拡大するとの意図はノーベル委員会の報告書にもたびたび言及されていた。様々な要素が 1 つになったタイミングが 1968 年であったというところであろう。

（6）まとめ

全体の分析を通して、得られた点として、2 点を挙げておきたい。

第 1 に、本研究を通して感じられたのは、文学賞の選考が純粋に作品の評価では終わらない面があったことである。欧米の主要作家にノーベル賞を授与し終えたところで、1960 年代以降、ノーベル賞自体のグローバル化が強く意識されるようになる。欧米人のための賞ではなく、世界全体を対象にした賞に変えたいとの意欲をスウェーデン・アカデミー会員はもっていた。

さらに、日本人初のノーベル文学賞受賞者を出すにあたり、スウェーデン・アカデミーは候補の日本での位置づけ、評判に多大な関心を寄せていた。それは、1965 年のローンストロームの報告書に顕著である。日本における文学界での評価、さらに一般国民の評価さえ気にしていた。それは日本におけるノーベル文学賞の権威を保つために必要と考えられたのであろう。日本人初の受賞者であるだけにその選考に慎重になったことは理解できる。

第 2 に、ノーベル文学賞と日本とのかかわりを考えたとき、日本とヨーロッパとの間の距離である。それは、単に物理的な距離ではなく、文化の距離である。文学の場合、作品を鑑賞するためには、まず翻訳が必要である。1950 年代後半に日本人候補の推薦が本格化し、スウェーデン・アカデミーの側も高い関心を示した。その背景には、アメリカ人研究者による日本人候補の著作の翻訳があり、そうした基盤があって初めて日本人候補がノーベル文学賞選考の土俵に上がった。この翻訳の担い手になったアメリカ人日本文学研究者の存在は極めて大きい。彼らは、翻訳だけでなく、専門家報告書という形でも、スウェーデン・アカデミーの選考に多大な影響を与えた。候補の作家らと選考母体のスウェーデン・アカデミーとの間にいる中間的な存在にもっと注目すべきであろう。彼らは、日本とスウェーデンとの間の文化の媒介者となったのである。

以上のように、ノーベル文学賞は、純粋に文学的評価により決まると考えられているが、実際には様々な思惑が錯綜した。様々なアクターの文学をめぐる 10 年にも及ぶ政治力学の末に、ようやく 1968 年の川端の受賞となった。

＜引用文献＞

① 吉武　信彦、ノーベル賞の国際政治学―ノーベル文学賞と日本：日本人初の文学賞候補、賀川豊彦、(1)、(2・完)、地域政策研究（高崎経済大学）、16 巻 1 号、2013、1-13、16 巻 3 号、2014、1-14

② 吉武　信彦、ノーベル賞の国際政治学―ノーベル平和賞と日本：序説、地域政策研究（高崎経済大学）、12 巻 4 号、2010、21-43

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 吉武信彦	４．巻 25
２．論文標題 ノーベル文学賞の国際政治学―ノーベル文学賞と日本、三島由紀夫をめぐる推薦と選考　1963～1968年	５．発行年 2023年
３．雑誌名 地域政策研究	６．最初と最後の頁 39、54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉武信彦	４．巻 24
２．論文標題 ノーベル賞の国際政治学ーノーベル文学賞と日本、西脇順三郎をめぐる推薦と選考　1958～1968年ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 地域政策研究	６．最初と最後の頁 1、23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉武信彦	４．巻 723号
２．論文標題 ノーベル賞の季節	５．発行年 2020年
３．雑誌名 改革者	６．最初と最後の頁 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉武信彦	４．巻 22
２．論文標題 ノーベル賞の国際政治学―ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考　1958～1965年	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地域政策研究	６．最初と最後の頁 29、50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉武信彦	4．巻 21
2．論文標題 ノーベル賞の国際政治学――ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究（1）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地域政策研究	6．最初と最後の頁 1、18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉武信彦	4．巻 21
2．論文標題 ノーベル賞の国際政治学――ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究（2・完）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地域政策研究	6．最初と最後の頁 13、28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計3件

1．著者名 村井誠人編（吉武は2つの章を執筆）	4．発行年 2024年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 -
3．書名 『スウェーデンを知るための64章』「日本から見たスウェーデン―振幅の激しいイメージを超えて」、「ノーベル賞―ノーベルが後世に遺したかったもの」	

1．著者名 植田隆子編（吉武は1つの章を執筆）	4．発行年 2021年
2．出版社 文眞堂	5．総ページ数 335
3．書名 『新型コロナ危機と欧州―ＥＵ・加盟10カ国と英国の対応』「スウェーデン―独自路線とＥＵ協調との狭間で」	

１．著者名 岡澤憲芙監修、日瑞150年委員会編（吉武は1つの章を執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 389
３．書名 『日本・スウェーデン交流150年―足跡と今、そしてこれから』「ノーベル賞からみた日本・スウェーデン関係―その歴史的展開と今後の課題」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関